3年間の面談計画の立案

生徒のやる気と長所を引き出す八つの面談

面談は教師による1人ひとりの生徒理解の場であり、生徒の自己理解の場でもある。生徒が自分の進路を決め、目標に向かって進むには、各学年各時期に対応した面談が重要。面談の中で生徒にはどのように働きかければよいか、そのポイントについて考えたい。

面談は、教師が生徒を理解する場としてはもちろん、生徒が自分自身を知る手がかりとしても大切な機会である。

毎日の授業の中での言動や表情からも、生徒の心の一端をのぞくことはできる。しかし、心の底でなにを考え、どんな悩みを持っているかはなかなかわからない。その溝を埋める一つの方法が面談である。

生徒の中には自分から話をすることが苦手で、教師が黙っているといつまでたっても自己表現しない者も少なからずいるようだ。以前なら一斉指導で「こうあるべきだ」というだけで、生徒との共通理解はある程度可能だったが、今は1人ひとりの心の中に入っていかないと生徒がなにを考え、どうしたいのかがわからないという話も聞く。もしそうなら、個別指導の重要性はいっそう高まっているといえる。

また、以前と比べて生徒の問題解決能力が低下し、1人で課題に立ち向かう力が落ちているともいわれる。大学入試制度の複雑化が進み、全体指導では生徒1人ひとりのニーズに対応できないといったことも、個別指導の重要性を高める要因となっている。

面談のためのまとまった時間がとれないとき……

一般に教師からの働きかけには次のようなものがある。

・学年ごとに定められた、定期的な担任面談

・必要に応じて行う面談（学習上・生活上の問題が現象として表れているとき など）

・授業、SHR、LHR、清掃時、部活動などでの生徒への語りかけ

一般的には教師と生徒が1対1で話す場が「面談」であるといえるが、定期的面談だけが面談ではない。掃除のとき、廊下で擦れ違ったとき、ちょっとした場面で生徒に語りかける、それも面談の一つの方法である。たとえ時間が短くても、面談の機会は多いほどよい。その生徒になんの問題がないようでも、共通の場を作っておくのは大切なことである。面談の時間を確保するための工夫として、「1分面接」と称し、毎日昼休みや放課後にクラスの生徒全員と話すことを学校ぐるみで行っている高校もある。

欠点の指摘ではなくほめてその気にさせる

面談は教師と生徒のキャッチボールに例えることができよう。しかし、話をしたがらない生徒は、教師と対面することで畏縮することが多いので、ともすると教師からの一方通行になる危険がある。実りある面談のコツは、まず気軽になんでも話せる雰囲気を作ること。例えば「部活の試合で勝ったんだってね」など、その生徒にとって緊張が解けるようなこと、関心があることから話し始めたい。そして、生徒の話に耳を傾けてよく聞くこと。「うん、そうか」「なるほど、いい考えだね」というように、生徒が話し終えるまで、会話を遮らず最後まで聞く。自分が生徒の立場だったら……と生徒の会話の内容に共感しながら聞くことが大切であると思われる。

また、生徒のよいところを見つけ、ほめてあげて自信を持たせることも大切だといえよう。おそらく教師との面談が好きという生徒はそう多くはないだろう。生徒にしてみれば、面談の中で自分がほめられるとは考えにくい。「英語の成績が落ちた」「最近、生活態度が悪い」などは、実はだれよりも生徒本人が一番よくわかっているのだ。それより、ちょっとでもよい点を見つけてあげれば、生徒は心を開き、向上心を持つようになるかもしれない。中には「怒ってもいうことを聞かないのでまた怒る」という悪循環に陥るケースもあるが、こういう状況は極力避けたい。

また、教師の側があまり準備をせずに面談に臨み、面談中に考えながら話すというのはどうだろうか。1年の初めごろの面談はともかく、教師自身が前もって生徒の性格、成績、適性、志望などを知っておくことが望ましい。教師が生徒の将来像を持たずに面談を行うと、生徒を不安がらせたり、迷わせたりすることになりかねない。

学年団で取り組む場合は、ある程度の指導法・質問に対する回答の一致も必要であろう。それがないと、「あの先生とうちの先生では、いうことが全然違う」となってしまうこともあるからだ。

参考プラン
3年間の面談計画と指導目標の例

		面談	進路の目標	教科の目標
1年次	1学期	生徒理解のための面談 〈生徒による職業研究〉	基本的生活習慣の確立	予習・復習の定着
	2学期	職業研究の結果を基にした面談 ↓ 文理選択	自己理解と進路情報の活用	主要教科の基礎力養成
	3学期		進路の方向決定（文・理／4年制大・短大・就職）	基礎学力強化・得意科目の育成
2年次	1学期	しきり直しの面談	生徒の文理類型に対応する学習習慣の確立	基礎を応用する力の伸長
	2学期	〈生徒による大学・学部研究〉 生徒の志望校選択を基にした面談 ↓ コース科目選択	学部・学科の研究とそれに対応する学習の定着	得意科目の養成
	3学期	入試を意識させる面談	学部・学科の決定	志望校対応学力の養成スタート
3年次	1学期	志望校合格のための計画を確認	第1志望校（群）の確定	志望校対応学力の養成 基礎学力の最終チェック
	2学期	メンタルケア	受験校の決定	実戦応用力の養成
	3学期			

1年次は生徒が自分を知り、職業について考える年、2年次は大学を意識し、目標に向けてスタートする年、3年次は受験勉強の年と位置づけられる。「面談の目的」の時期はあくまでめやすであって、高校や教師の方針、やり方によって多少のズレは出てくる。いずれにせよ、年間を見とおした発展的な面談になるようにしたい。

各学年の面談のポイント

1年次

面談1・生徒理解

生徒と教師の信頼関係を築く

入学して最初の面談は、顔合わせの意味合いが強い。生徒を理解するための面談であり、話す内容はその糸口になるような軽いものがいいだろう。「高校生活になじんだか、不安はないか」「友達はできたか」「趣味はなにか」「どんな部活に入ったか」「ついていけない教科はあるか」といった雑談めいたことでよい。カウンセリングの基本は相手のいうことを聞いてやることだという。生徒の心のカベを取り除いてやり、生徒が自発的に話せるような雰囲気作りに心がけたい。

注意したいのは「無理になにかを聞き出そうとしないこと」。この時期に突っ込んだ進路指導はまだ難しいことが多い。生徒との信頼関係を築くことが最大の目的だから、警戒心を持たせるような行動は禁物だ。話しながら教師がメモを取るのもできればやめた方がいい。生徒の中にはそれだけで警戒してしまう者もいるからだ。次の日には「先生はメモを取っていろいろ聞き出す」という噂が、クラス中を飛び交うというケースもある。

学習に関しては、「中学生から高校生への学習サイクルの転換」が、この時期の最大の課題である。中学と高校の違いは、①授業の進度が速い、②予習をしないと授業についていけない、③科目の内容が難しい、④テストが多い、の4点に集約される。

高校での学習の決め手は予習である。「授業を聞くだけで理解できた中学」と「予習をしなければ理解できない高校」との違いをしっかり認識させ、依存型の学習から脱却するヒントとなるような面談を行いたい。この時期の生徒の中には予習のしかたを知らない者もいる。こうした生徒に、ただ「予習しろ」というだけでは具体的行動にはつながらないことが多い。ノートのとり方、テストの準備のしかた、具体的な学習法を指導すること。予習・復習をきちんとすれば、授業中心の学習で入試へ対応できる学力がつくということを理解させることが重要だ。

面談2・職業研究

自己理解・適性把握を手助け

1年次に行う面談の中では、①職業に関する知識を生徒が得るための手助け、②2年次の文理選択・科目選択に向けて科目の理解を深めさせる、がその重要な目的となる。こういった目的で1・2学期に面談を行っている学校も多いのではないだろうか。

①、②とも、生徒に事前にそれについて調べさせてから面談に当たるようにしたい。大切なのは「生徒が自分の頭で考える」ことである。生徒の中には依存心が強く、こちらが資料を用意したのでは受け身の姿勢から抜け出せない者もいる。単に「考えておくように」で終えるのではなく、レポートにするといった作業をさせることも考えられる。これは3年間の面談すべてについていえよう。

①の目的は、生徒に就きたい職業を考えさせ、それによって就きたい職業を現実のものとするための努力の必要性を理解させること。この時期まで、多くの生徒は職業について深く考えたことがない。この段階で思いつく職業といえば、教師、医師、看護婦、マスコミ程度ではないだろうか。

それを踏まえたうえで、生徒の「なんとなく、それになりたい」という素朴な願いを認めてやりたい。むしろ、そこから進路指導は始まると考えるべきであろう。たとえ、「テレビのドラマで見て」のような単純な理由でも、その動機はきちんと認めてやる。きっかけはテレビ、漫画といったささいなことでもかまわない。根掘り葉掘り問い詰めるのではなく、「その職業のどこに興味を持ったのか」と質問を広げていき、「それならこんな職業もある」と、生徒の職業観を発展させていくことがこの時期に行う面談の目的である。

レポートを書かせる際は、なりたい職業をできれば三つ程度書かせたい。以降の科目選択、大学選択もそうだが、指導の際「絞り込ませる」ことではなく、選択の幅、可能性を「広げてやる」よう心がけたい。

①について生徒が考えた結果、その職業に就くには、文理どちらを選び、どういった教科を勉強すればいいかが、おぼろげながらわかってくる。それでも、現実にはほとんどの生徒が文理選択、科目選択を迷う。実際、自分のなりたいものと科目との関連を見極めることは、生徒にとって難しいことだといえる。したがって、放っておくと数学が嫌いだから文系、理科の点数がいいから理系、といった単純な理由で文理選択をしてしまうこともあろう。もう1度、就きたい職業と結びつけて学ぶ教科を選ぶという原点を思い起こさせ、「なんとなく文系、なんとなく理系」に流されていないか、面談の中で個別にチェックすることが必要だ。

また、入学してまもないこの段階の生徒は、自分の学んだことのない教科・科目に対しては無関心であることも多い。面談とは違うが、生徒に教科・科目に対する関心を持たせるために、1年の学年団に属する教科担任にガイダンスを行ってもらうのもよいのではないだろうか。

生徒から、自分の担当以外の科目について尋ねられたとき、「そんなことはその教科の先生に聞きなさい」では、次から質問に来なくなるだろう。答えられない質問でも正面から聞いてやって、「教科の担当に聞いて調べてくる」という姿勢を持っていたい。

この時点で科目選択をしても、後で変わる可能性は十分ある。また、選択するときには幅を持たせて多少多めに選ばせた方がよいだろう。「そんなに取っても単位が取れない、少なくした方がいい」とアドバイスするよりは、「できるだけ可能性を広げさせる」という観点で面談に臨みたい。

2年次

面談3・しきり直し

学習習慣が定着していない生徒に

2年次最初の面談。1年次の1年間で学力差が広がり、それが固定化する傾向が出てくる。1年次に学習習慣が定着できなかった生徒、成績が伸びなかった生徒を主な対象とする面談だ。英・数・国（主に古文・漢文）が対策の中心になる。

まず、1年間の成績を自分で分析させ、具体的にどの科目のどこが悪かったのか、どこでつまずいたのか気づかせる。大切なのは、生徒が自分で気づくことである。教師の側からは、できなかったところの指摘ではなく、「英語の構文はもう一つだったが、単語はよくできていた」など、よい点を認め、意欲を高める指導が欲しい。そして、「こういうふうに勉強してはどうか」と方向性を出してやることもできるのではないだろうか。

この時期はクラス替えによって精神面で不安定な生徒もいるので、そうした生徒のメンタルケアも必要となる。

面談4・大学選択

具体的に志望校を意識させる

生徒に志望校を設定させ、合格のためにどうすればいいか、のヒントを与えるのが目的。1年次の職業研究が「自分はどうなりたいのか」を考える自己理解のための面談だとすれば、この時期の面談は「目標を実現するためにはどこを伸ばせばいいのか、どこが足りなくてどう補えばいいのか」を生

参考プラン
生徒の学習習慣の定着度を見るチェック項目

国語	・読書習慣がなく、漫画以外はほとんど本や新聞を読まない。 ・古文で辞書を使う習慣がついていない。 ・古文・漢文の文法や口語訳に苦手意識を持っている。 ・授業に集中できない。板書を写すことに集中している。
数学	・予備校、塾を中心とした学習習慣である。 ・定期試験前の学習が不十分であり、問題演習をしない。 ・グラフや図形が描けない。 ・授業に集中できない。板書を写すことに集中している。
英語	・定期試験後に復習をせず、わからないところをそのままにしている。 ・文法、英作文に苦手意識を持っている。 ・辞書を正しく使うことができない。教科書ガイドなどで意味を調べている。 ・予習では単語の意味を調べる程度で、文章を訳すまでいたっていない。

１年次で学習習慣を確立できないと、２年次で学力差はさらに広がり、そのまま固定化するおそれもある。１年次のデータや面談を通して学習習慣が未定着の生徒を発見するとともに、２年次の早い時期に生徒に望ましい学習、生活習慣を浸透させたい。逆に、既に学習習慣が確立できている生徒に対しては、それが成績向上に結びつくことを理解させ、励ましとしたい。

徒が考え、自己を分析するきっかけとなる面談といえる。

志望校選びは、この段階では偏差値などあまり気にさせず、できるだけ純粋に自分の学びたい大学はどこかという観点から選ばせる。ある高校では、自分が行きたい大学を3段階5校選ばせている。あこがれ校2校、実力相応校2校、安全校1校である。あこがれ校がないと生徒は現状の成績に満足してしまうし、安全校がないと成績が下がったときに心の支えとなるものがなくなり、つぶれてしまう危険があるためだという。

選んだあこがれ校に対して、「えっ、お前が?」という顔をしたり、「もっと現実的な大学を選びなさい」というのは絶対禁物。生徒には夢、希望を持たせ続けることが大切である。3年次になってもいえることだが、「模試の結果などの数値は重要なデータではあるが、その数字を必要以上に絶対視しない」は、大原則である。偏差値は毎回変動する。模試の偏差値は現時点でのデータであり、今後の学習次第で大きく変わるものであると考えるべきである。

志望校（群）を選んだら、その入試科目も調べさせる。その際、あくまで最も受験科目の多い方式を基準にさせること。1教科受験の方式やあまりにも特殊な方式を選択すると、併願できる大学・学部数が激減することを生徒によくわからせる。1年次の職業研究同様、「生徒の選択の幅を狭める」ことが面談の目的ではないということである。

面談5・受験に向けて
現役合格へのスタート地点

3学期の面談。3年次の3学期は実際には入試がスタートするため、2年次3学期が入試1年前である。受験勉強のスタート地点であり、当然、面談もその確認と実行が目的となる。

入試は総合点で合否が決まる。得点源がなければ合格できない。傾斜配点、得意科目優遇の傾向が強まっている現在の入試制度ではなおさらそうだ。したがって、志望する学部群の重点科目に重きを置いた学習が必要で、苦手科目は総合点の足を引っ張らなければよいというアドバイスもできよう。ただし、苦手科目を放っておくとその中の苦手分野が雪だるま式に大きくなる。この2点を念頭に置きたい。

またこの時期、受験勉強開始に当たって、成績は必ずしも一直線で上昇しないことを認識させることも有効だ。何回もスランプがあることを理解させ、成績が下がったときの精神的落ち込みを防ぐ布石を打っておくためである。

3年次

面談6・受験指導
志望校合格めざし年間学習計画作成

1学期の面談。まず、志望校の再確認を行う。まだ決まっていない、ということが極力ないようにしたい。また、決めている場合でも、職業観やそこでなにがやりたいか、の観点から生徒がきちんと選んでいるかをもう1度確認する。

そして、志望校合格をめざした学習計画を立てさせる。これは年間と週間の2本立てが必要であろう。いい換えれば、年間の学習計画は長期の、週間のそれは短期計画といえよう。年間で1年の流れを、週間で勉強のリズムをつかませる。計画は紙に書かせ、それを見ながら面談を進める。そのうえで、生徒個々に合った学習法をアドバイスする。

高校3年生といえども、基本的にこの時期は基礎固めの時期である。ここでつまずくと、秋以降の追い込みがきかなくなる。したがって、1学期は2学期以降を勉強できる環境にするための下準備の要素もあるが、その内容とやり方は個々の生徒に応じて変わってくるので、3年次は特に個別対応がキーになる。

また、3年次で受ける模試の成績を時系列の表にするよう指導するとよいだろう。自分の学習の結果を、実際に自らの手を動かして検証することで、生徒自身が自分の弱点を発見し、解決への努力を積み上げていく契機になるからだ。

保護者の理解、つまり生徒だけでなく保護者の意見を知り、生徒の希望を理解しているかどうかを確認することも大事になる。多くの場合、志望校は2学期末の3者面談で最終的に決まることになるが、その時点で生徒と保護者の考えがかけ離れていると、後々のもめごとのもとになりやすい。保護者は併願する私立大の学費など経済的な問題や、遠くには行かせたくないといった、学力とは別の次元の問題を抱えていることもあるので、3年次の早い時期から保護者と面談の機会を持つのも一つの方法といえる。

面談7・メンタルケア
スランプ脱出は励ましから

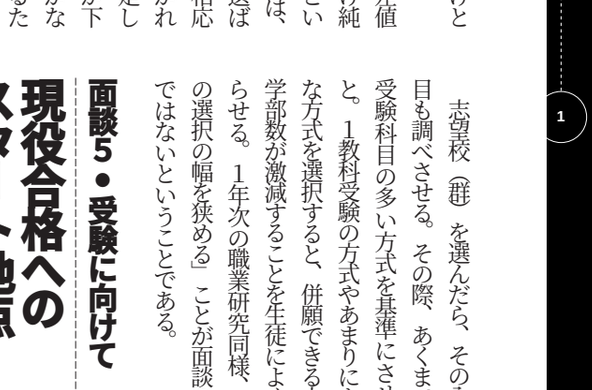
2学期の面談は、精神面のフォローが大きな要素だ。夏休み前、生徒の中にはあれもこれもと計画を立てて休みに突入する者もいるが、実際には計画どおりにいかないことがほとんど。焦りや不安で落ち込んだり、心が揺れてスランプになりやすい。この時期に頼られる担任になるかそうでないかの差は大きい。入試までの手順を示し安心させ、今に集中させたい。

模試の成績が伸びない場合は、どこがどうできていないかを分析して、生徒を元気づけてやる。また、模試の個人成績票を見れば、マークミスで失敗したのか、時間切れでできなかったかわかるが、生徒の中には偏差値ばかり気にして、意外に成績票をしっかり見ない者もいる。自分で分析できない生徒に対しては、教師が確認してやることだ。

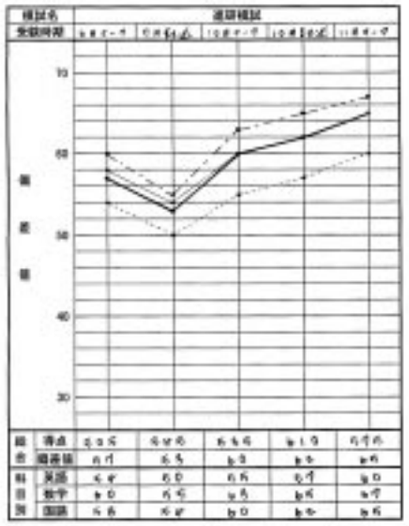
面談8・志望校最終決定
生徒の参謀として具体的アドバイス

11月から12月に行う最後の面談。3者面談で志望校を最終的に決める。あこがれ校を捨てようとする生徒が出てくるが、最後まであきらめる必要はないことを理解させたいもの。「可能性があるんだから……」と安心させ、励ましてやりたい。

受験校が決まったら、日程は無理のない適正なものか、バッティングしていないかなど、具体的にチェックしてアドバイスする。それには教師同士の情報交換などが必要で、密に連絡を取り合いたい。



志望校記入用紙（例）
生徒に志望校を選ばせたら、その入試科目なども自分で調べさせる。そうすることで、ある教科を捨てたら併願できる大学・学部が激減することに自分で気づくだろう。ただし、入試方式はあくまで最も受験科目が多いものを基準にさせる。この時期に特殊な方式に目を向けさせると、併願校の幅が著しく減ってしまううえ、志望校を変更したとき対応が難しくなる。



模試の成績推移表（例）
教師が生徒の成績動向を把握するのはもちろん、3年次には生徒自身にも模試などの成績推移を自分で記入させたい。自分の手で学習結果を検証することで弱点を発見し、解決への努力を積み上げる材料となるように心がけたい。生徒が自分自身で気づき、自分の頭で考えるようしむけることが重要だ。